

回想のなかの幼年期

—— 自叙伝による「家」と「家族」の人間形成史研究（Ⅰ）——

太 田 素 子

Reminiscences of Infancies

—— A Study of History of the Character Formation based on Autobiographies
in Traditional Families and Modern Families in Japan (1) ——

Motoko OHTA

Investigating six autobiographies written in 17th and 18th centuries, we can find many reminiscences of writer's Infancies. In case of Samurai, he began writing, reading and poem composition from three year old. In cases of Merchants and Entertainers, they were brought up under the threats that if they did mischief parents might abandon them. In any event, in those times families took care of their children eagerly.

一 はじめに

17-9世紀、近世日本で書かれた回想録を読むと、幼年期（小論では概ね数え10歳以下とする）の自分の性格や行いについての、生き生きとした描写に驚かされることがある。数え6歳未満の回想も存在するので、おそらく回想の幾分かは周囲の大人が繰り返し話して聴かせた思い出話と、自己の記憶がいつの間にか区別のつかない状態で、「回想」となったものなのだろう。周囲の大人が、子ども時代の思い出を、成長後の本人に意識的に話して聞かせるか、それほど意識的でもないかということ、時代や階層によって、また個人的な資質によっても多様であろう。が、長い時間軸を採ることによって、個々の個別性を超えた時代としての一程の傾向をそこに見いだすことができるのではないか。近世についていえば、人々は乳幼児期のしつけが人格形成上きわめて大きな意義を

持つと考え、くり返し能弁に子ども時代のエピソードを、大人の解釈を含めて語り聞かせたように思われるのである。

また一方では、幼年期の人格形成をめぐるエピソードが自叙伝に豊富にちりばめられているかどうか、つまり本人が幼年期の思い出を詳細に書き記そうとするか否かという事実は、書き手が幼年期の体験を人格形成上重要視しているか否かにも規定される。さらには、どのような思い出に価値を見いだしているかという自我や自己意識のありようによって、言及される内容は異なってくるだろう。大人の子育てへの意識性と本人の省察の中の幼年期の価値付けとは、相関を持ちながら自叙伝の記述内容に反映していると予想される。

本研究は、グループ研究「『家』と『家族』における人間形成史の研究」（代表 小山静子⁽¹⁾）の一環である。筆者の研究分担は日本人の自叙伝のなかから、出生年が1850年（嘉永3年）以前の人物

によって書かれた自叙伝を対象とすることだった。したがって、研究の現段階では20世紀生まれの人物まで分析の対象が広がっておらず、「長い時間軸」というわりには限定された史料紹介の域を出ることが難しいかもしれない。しかし、担当した範囲でも、明治初期、近代国家の形成に積極的に活躍した天保(1830年代)生まれ以降の人々と、それ以前の人々、つまり主として近世社会の制度的な枠組みのなかで生きた人々との間には、記述内容に重要な変化があるように見える。プレ天保世代が、豊富に幼年期のエピソードを語るのに対して、天保世代とポスト天保世代になると、青年期の回想や成人期の業績がより重要視されている印象が強い。後者は変動の激しい時代を生きたという事情が関与しているだろう。それでは、プレ天保世代の自叙伝に見られる豊富な幼年期の語りは、何を意味しているのだろうか。

小論では、筆者が担当した22点の自叙伝のなかから、とくにプレ天保世代の自叙伝に見られる豊富な幼年期の語りに注目し、その内容と性格とを検討したい。尚、幼年期の回想に焦点化することが最終的な目標だが、幼年期の回想の性格を理解するためにも、まずは生涯を通じた人格の発展を視野に入れて、広く史料をすくい上げるように心がけている。

二 自叙伝研究の課題と方法

伝記や自叙伝といったきわめて主観性の強い文書史料を、実証的な研究の素材とするための方法的な検討は、文学史、精神分析的心理学、社会学、文化人類学などですでにさまざまな試みがある⁽²⁾。また社会史や心性史においても、I. & G. ハルダッハ夫妻による『ドイツ/子どもの社会史1700-1900年の自伝による証言』(以下、『ドイツ子ども史』と略記)や、D. ヴィンセントの『パンと

知識と解放と—19世紀イギリス労働者階級の自叙伝を読む』(以下、『パン・知識・解放』と略記)など、すでに自叙伝を用いた先駆的な研究が日本にも紹介されている⁽³⁾。

とくに自叙伝を用いた二つの社会史的な研究は、方法の上で対照的だ。『ドイツ子ども史』が、18世紀、19世紀という機械的な時間軸と階層別の空間軸を採り、それぞれを代表する自叙伝のなかから人間関係、物質的環境、学習、遊び、労働という範疇をたてて、これもやや機械的に自叙伝に書かれた「事実」を抽出しようとしているのに対して、『パン・知識・解放』の方は産業革命の開始による労働者階級の誕生の時期に照準を合わせ、子ども観と彼らが知識を獲得することの意味、彼らにとっての「有用な知識」がどうとらえられていたかを明らかにしようとする心性史研究である。前者はどちらかというデータベースを作成する仕事であって、一つ一つの史料の記事内容を分析する枠組みについて自覚的でないのに対して、後者は自叙伝に書かれた「真実」の歴史的な性格に関する分析枠組みを限定し、自叙伝という史料から設定した課題にとって本質的だと考えられる記述だけを抽出してくる。おそらく、その分析枠組みが自叙伝そのものの「真実」が要請する内在的な分析枠組みであるかどうかということ、歴史研究としてどれだけ本質的な問題につながっているか、ということが、研究の成否を決めるのであろう。

ところで『パン・知識・解放』は、訳者も指摘するようにオーラルヒストリーの方法を文献史料に適用しようとする心性史研究だ⁽⁴⁾。同様に、筆者も自叙伝の分析に文化人類学の方法が参考になると考えている。

L.L. ラングネスは、人類学におけるライフヒストリー法の歴史的、概念的発展の紹介を手際よく紹介した著書『ライフヒストリー研究入門—伝記

への人類学的アプローチ』⁽⁵⁾のなかで、個人中心的 (person centered) 民族誌研究の動向が、ライフヒストリー・アプローチの必要性を促したと述べる。また、その具体的な方法について、「未知の外国人を友人にした場合にやっているような……一種の洞察力と細心の配慮によって描き出そうとする」個人の人生の描写なのだと、比喩的に語る⁽⁶⁾。よく指摘されるように、「個人史のリアリティ」と「自叙伝の真実」は必ずしも同じではないのだが、ライフヒストリー研究ではそのズレこそが、対象を理解する上で重要な意味を持つのだ。つまり、そのズレを手がかりに、彼らの自己認識の背後にある「無限に多様な生活様式」へと理解を深めることができるのである。

それは、「特定の個人の属する文化では、嘘か錯覚と決めつけられてしまうような経験の中に、ある真実を感じ取る技術」であり、「ふつうの人々の生活をその文化自体の中で記述する」というアプローチであるともいわれる。また、「出来事の編年史をはるかに越えて、熟練した目と手によって本質的な個人の肖像を引き出す」ような対象者と研究者の共同作業、「より深い理解へいたるよう導くアプローチ」などとも説明されている⁽⁷⁾。以上のようなラングネスの説明は、Ph. アリエスが「心性史の方法」で述べた、過去の人々の感受性や思考方法のなかに、我々現代の生活者と共通なものを理解するとともに、次には、現代人とのズレのなかに、過去の文化を読み解く手がかりを求めるといった指摘と共通するものであろう⁽⁸⁾。

それでは、ライフヒストリー・アプローチの立場からは、伝記とはどのような資料なのだろうか。ラングネスは、「人がその経験について語るときに用いるシンボルとイメージこそが、…人生そのものに実態 (サブスタンス) と組織 (テクスチャ) を与えている」と強調する。アイデンティティのシンボリックな要素が変化したために、自己意識

の全体が変わる例をあげることは難しくないともいう。したがって、出版された (完成した) 伝記は、人物のエッセンスを抽出し、テキストが与えるテーマを核として特徴づけが行われているものとみななければならない。「自叙伝」であれば自らの人生の意味付けが自叙伝全体を構造化するし、他者が書いた「伝記」であれば執筆者のシンボルやイメージと対象者自身のそれが影響し合って特徴が出来上がる。いずれの場合でも、伝記の執筆者がテーマに自覚的なこともあるし、読者がそのテーマを発見する場合もありえ、「伝記」は「自叙伝」に比べて、テーマがとらえにくく構造が複雑になる可能性が高い。

『ドイツ子ども史』の場合も『パン・知識・解放』の場合も、分析の対象は自叙伝に限定している。文化人類学では直接の交流のなかで伝記の素材を採集するのだから、多くの場合、伝記の執筆者が同時代人である。ところが歴史研究では、例えば近世の主人公の伝記を大正期の人物が書き出したとして、伝記執筆者の生きた時代のテーマと対象となる主人公の生きた時代のテーマや構造双方を一度に読み解くことは不可能ではないが複雑な作業となる。したがって、まず研究対象を自叙伝に限定し、主人公が自らに課し、また自らの人生を評価する尺度となった彼らのテーマを明らかにしたい。とくに、ここでは人間形成のプロセスが研究課題なのだから、彼らがその人格形成のプロセスを意味づける「シンボルやイメージ」、それらによって構成されるテーマの歴史が検討課題である。

自叙伝のテーマ、とくにその成長過程の意味づけのテーマは、おそらく個々の自叙伝によって個別的なものであろう。「出来事の編年史をはるかに越えて、熟練した目と手によって本質的な個人の肖像を引き出す」ような、内在的で個別的な、しかし 17-9 世紀の人間形成にとって本質的なテーマ

マは、それら個々の自叙伝から帰納的に導きだされてくる必要があるが、筆者はここで仮説的に二つのテーマを掲げ、それらが個々の自叙伝のなかで本質的なテーマの一つとなっているか否かを検討したい。

ひとつは、**共同体の人格から自立した個人の形成へ**、というテーマで、執筆者の自我意識や生活空間をこの視点から検討したいと考えている。日本の自叙伝研究の先駆者の一人、佐伯彰一⁽¹⁰⁾は、近代的な自我の誕生と自叙伝の相互関係に注目しながら、日本の自叙伝の特殊な性格について注意を喚起している。曰く、ガンジー『自伝』は、思想実験の率直な記録であったし、ネールの『自伝』は、獄中の孤独に耐える作業であると同時に、過去の政治的事件について自身で思索するために書かれており、いずれも自己中心的な視点から書かれたという意味で、近代的な自我の現れ、西洋化・近代化の所産という性格を持っている。中国の自叙伝も、1920年代から30年代始めに噴出しており、改革の機運と期をいつにしている、自叙伝ジャンルは、いわゆる「アジア的な停滞」からの脱出をめざす、近代化促進の鋭敏なバロメーターだったという。明治以降の日本の場合も同様で、福沢諭吉、渋沢栄一、前島密、内村鑑三、木下尚江らの自叙伝は、いずれも西洋との接触体験をもつ近代化の推進者であった。しかし、「非ヨーロッパ地域における著しい例外」を日本の自叙伝は持つという。それは、一つは「平安朝の女流日記群」であるが、今ひとつが「江戸時代の自叙伝文学」だということである⁽¹¹⁾。

筆者は、これを長い時間軸で見れば、近代化へのプロセスにありながら、近世日本の家が特殊な発展をなし得たことと関係があるのではないかと考えている。じっさい戦国時代の武士の世界には、共同体から放り出された個の強さ、個人主義の響きを感じさせる処世訓や家訓がある。しかし

近世に入り、家の固定化とともに、個人というよりは、家や家系にアイデンティティが存する言説が増えてゆく。家は親族、姻戚で守り合う構造を作るから、ふたたび個人が家という共同体に埋没する傾向が見られ、近代的な自叙伝とは異なる家の歴史を紡いだような自叙伝的言説⁽¹²⁾もうまれた。そのような意味で、個々の自叙伝が、自我と家意識のせめぎ合いをどのように反映しているのかに注目したい。そのことは、日本の個人主義の成立史を探ることにともつながるわけで、人間形成を考える上で重要な問題である。

もう一つは、**家・家族・学校の関係史**というテーマだ。近代に入ると、国家の組織した体系的な学校制度が子どもたちの人間形成を主要に担う社会に突入する。家族のおこなう「家庭教育」は、しばしば学校教育の準備や補助的な役割に限定されてゆく。西欧では、家族が教師と学校を選び、家族の意向が教育目標や教育内容に反映しやすい歴史的な構造を持っていたといわれるが、日本の場合、近世の家は子どもの教育にどのような影響力を行使していたのだろうか。日本でも西欧の家族と同様の影響力を行使できた時代があったのか否か、寺子屋（手習い塾）から藩校、私塾などさまざまな学校を自生させた近世という時代の、家や個人と学校との関係史を、自叙伝の記述から探りたい。

なお、自叙伝に関する共同研究において、可能であればデータベースを作成する試みは意義深い。その場合、機械的な指標をたててデータを収集するのではなく、仮説的な結論との緊張関係のなかでデータを集積することに意味があるのではないか。対象とする自叙伝について、記された事実内容の検討と伝記相互の比較のために、以下のような内容を含んだ項目を選んでデータを集積してはどうかと考えている。

・子ども期：生育儀礼、子ども期への言及の度

合い、子ども期の意味付け、子どもの成長、病と死へのまなざし、など。

- ・環境としての家族関係：家業と職業、世帯の構造と親密性・伴侶性、性役割と子育て、家と奉公人、親族との絆、兄弟数、子どもとの距離の取り方など。
- ・家族、親族の影響力：子どもへの期待、体質と気質・能力を見る目、早期教育、学校選択、生き方の示唆、しつけ、大人の個性と人格の影響力、
- ・進路選択と学校：進路選択の主体、学歴の意義、師か学校か、地方と中央、階層移動の実態
- ・事業・業績：共同体と家業の関係、近代産業との関係
- ・家族形成：伴侶の選択、子ども数と子どもへの関わり、人生における家族の意義など。

なお、自叙伝の研究に際して傍証や比較の素材として活用できるのは、第1の課題（共同体的人格から自立した個人の形成へ）との関係では、家族構造、出生率や乳幼児死亡、就学率、婚姻年齢と出産行動等の関する数量的なデータがあげられる。また、第2の課題（家・家族・学校の関係史）との関係では、学校制度の普及状況、受験競争の実態、親たちの文学作品、雑誌への投稿記事などがある。

三 史料の特徴

今回検討の対象とするのは、『日本人の自伝』別巻1所収の自叙伝のなかから、山鹿素行『配所残筆』、新井白石『折りたく柴の記』、松平定信『宇下人言』、初世中村仲蔵『月雪花寝物語』を、また純粋な意味では自叙伝とはいえないが、農民の自叙伝的回想を豊富に含んでいる田村吉茂『吉茂遺訓』、商人の記録として『榎本弥左衛門覚書』のな

かから「三子より之覚」をとりあげた⁽¹³⁾。なお、『日本人の自伝』別巻1に収録されている勝小吉『夢酔独言』は、養母の愛と嫉が興味深い、今回は触れることができなかった。機会を改めて検討したい。

まず最初に、これらの自叙伝が書き記された背景にふれることで、それぞれの著作の動機、つまり著者本人の人生回顧のテーマを探っておこう。また、近世日本の自叙伝における自我と家意識の関係、とくに子孫に対する思いの性格についてはじめに検討しておきたい。

山鹿素行（1622-85）『配所残筆』は、延宝3年（1675）、素行54歳のとき執筆された。自叙伝の中心テーマは学問弾圧に対する自らの正当性や生き様を明記しておくことだった。彼は代表作『聖教要録』の開版によって朱子学を批判、古学の立場を明らかにし、寛文6年（1666）10月3日、45歳のときに幕府から赤穂への配流を命じられた。自叙伝はまずその日の回想から書き起こされている。

老中からの伝達を北条安房守が伝え配所に仰せ付けられたとき、素行は死罪を覚悟して、辞世の一句を懐中した。その時「いさか心底に取り乱し候ことこれ無く候。もっとも迷惑は仕り候。この段は、我等日頃学問工夫のつとめ故と全く存じ候。」⁽¹⁴⁾驚きはしたが取り乱さなかったのは、日頃の学問の力だという。また、『聖教要録』の開版について「それ、我を罪するは周公・孔子の道を罪するなり。…聖人の道を罪するは時政の誤りなり。…凡そ道を知るの輩は必ず天災に逢う、その先従最も多し。…」⁽¹⁵⁾

佐伯はこの自叙伝を「10年前の死を覚悟した一日を改めてとらえ直し、自伝として定着させようとしたもの」であり、「気負いと自己劇化をたっぷりと含みながら、不思議な爽やかさ、超脱の気配」があると評しているが⁽¹⁶⁾、17世紀後半、時代はま

だ「戦国の遺風」個人主義的な雰囲気を残していたともいえよう。

ただ、近代的な個人主義と異なるのは、配所での死を覚悟した彼は、この自叙伝を世間に向けてではなく、弟と甥に遺言として書き残していることだ。まだ幼い息子万助（高基）には、利禄の幸せより子孫まで不義無道を行わない志を期待してもいる。配所で10年を迎えたことを機に、朱子学より老荘・仏教に関心の深い自身の立場や、実践的な学問論、修身平天下という基本の規矩の重要性や、些末な博学多識ではない学問観など、自身の学問の筋について子孫に書き残しているのだ。自我の強さは家意識においても発揮され、代々受け継がれたものとして受動的に家を意識するというより、能動的な子孫に対する働きかけが勝っている点が印象深い。以上、一言でいえば素行の自叙伝記述の動機は、子孫へ向けた自己の正当性の主張だったといえよう。

新井白石（1657-1725）の『折りたく柴の記』は、1716年に筆起しされており、白石数え60歳の著作である。この自叙伝は、將軍家継の夭逝と吉宗の登場による白石失脚の後に書かれた。したがって、7年間幕政を管理支配したあとで失脚した「くやしき」の自伝だと先行研究は評価する⁽¹⁷⁾。確かに自叙伝後半の自ら携わった施策に関する執拗なまでの自己弁護をそのように理解することはできよう。自叙伝の「序」には、執筆の動機について、両親が寡言だったため、もっと聞きたいことがあったが聞かないうちに亡くなり、悔しい思いをした。時間の余裕ができたので、子どものために書き記すのだと述べている。白石の場合、自叙伝記述の動機は、政策決定への参与の証言と、判断の根拠を子孫に伝える事が第一義的に重要だったのであろう。

そして、素行・白石による近世前期の二つの自叙伝には、世襲制の社会における階層の流動性と、

後述する松平定信のように家筋で仕事に就くエリート的身近に、才能と努力、加えて好運とによって、専門職に上り詰めてゆく学者たちの生き様があったことを映し出している。

松平定信（1758-1829）が著わした自叙伝『宇下人言』（ウカノヒトゴト、ウゲノヒトゴトとも）は、1793年（寛政5）に、定信が老中職を辞するまでを記したもの⁽¹⁸⁾で、従来から寛政の改革研究に不可欠の史料とされてきた。書名は「定信」を分解したものだが、自らを客観視する洒脱なユーモアのなかに、彼の自我の強さや自信をうかがわせている。前二者の自叙伝のように子孫の為に書くという意識はなく、自分の人生そのものが好奇心や探求の対象になっている。とくに注目されるのは、妻妾との緊密な人間関係を記している点であろう。

彼は安永5年松平定邦娘峰子と結婚したが、峰子は病気の後遺症で顔に痘痕があった。しかし、そういうことは夫婦愛に支障がないと、彼は書く。また、結婚後間もなく、妻の心得として峰子に『難波江』を書き付けて贈ったが、こうした自らの行為を「この頃はすべて理に馳せて人情に遠き事のみ」⁽¹⁹⁾と回想している。

また、病弱だった峰子は天明元年11月逝去するが、先立つ安永9年、初めて妾をおいた。その妾も亡くなった時、「予いと愛したれば、憂いかなしみたり」、庭を逍遙したので、そのとき以来月を見るのは憂きことに思えるようになった、などと率直に語る。松平の分家出身で、直系の家意識から自由だったためか、あるいは近世後期ともなると江戸の粋な社交文化が上級武士の生活感覚に影響を落とすのか、近代的な情愛家族に半歩近づいている。

芸能の世界に生きた初世中村仲蔵（1736-1790）の『月雪花寝物語』の場合は、「昔語りの相手もない」老年期を迎えて、「硯と切れ筆をつれづれの友に」「昔語りを書き散らす」と述べており、自叙

伝記述の動機は「老いの慰み」にある。「自我の統合」(E. エリクソン)⁽²¹⁾を実現する自分史の執筆は、今日でも積極的な老年期の過ごし方の一つであろう。芸を世襲される家に生まれていない彼の場合、老年期を能動的に生きる自我の強さは家には支えられていない。芸能の世界の徒弟的な人間関係と、自身の芸歴への達成感が晩年の彼を支えており、近世都市の人間形成の一つのかたちを現している。

田村吉茂(1790-1877)は、『農業自得』(1841)『農家肝要記』(1841)『吉茂子孫訓』(1863)『吉茂遺書』(1866)『農業根本記』(1870)など多くの著書を遺した篤農家で、『吉茂遺訓』は、1873年、吉茂84歳のときの著作である。田村家は鬼怒川近郊、河内郡下蒲生村(村高310石余)にあり、東西50間、南北60間の屋敷地の周囲に土塁と濠をめぐらした御館百姓家であった。吉茂の時代には、下蒲生村5給の相給地のうち、1旗本領の名主を務めている。

吉茂は代々地方に続いた名主家の当主として、禁欲的かつ勤勉なモラルの遵守を強調する。彼は、家督は先祖からの「預かり物」で、「一品たりとも不足にならぬように致し、子孫に譲るべくハ相続人の第一の勤め」⁽²²⁾と考えるような強固な家意識の持ち主だった。家族は個々に私財を持つてはならず、老人も丸腰になることによって、子孫を教訓し続けることが可能と考えていた。老人の役割は自らの経験とそこから得た教訓とを書き続けることにあり、自叙伝も彼にとっては自分の経験を語ることで、子孫へ生活の知恵や心構えを伝えたかったのである。

『榎本弥左衛門覚書』の著者、榎本弥左衛門(1625-1686)は、川越の商人で、おもに塩を商った。近世前期の商人の日記として貴重だが、「三子より之覚」のなかの子ども時代の記録は、後にまとめて記した回想録である。16歳で江戸へ商いに出、17

歳で商いに自覚をもち、20歳で元服、40歳で楽をしようと奮励努力したという彼のライフサイクルは、井原西鶴が『日本永代蔵』に描くような商人の理想を追求している。実際には1675年50歳で隠居を願い、1679年漸く倅八郎兵衛に嫁迎えることができた。彼の覚書は、商売のための政治経済に関する記事が多いが、成長過程の回想も含めて、こまめに記録すること自体への興味が強うかがわれる。

以上、それぞれの自叙伝の執筆動機を中心に、家と自我の関係に注目して史料の特質を探った。時代や階層がバラバラなので、一般化はしにくいだが、家と人間形成という問題にひきつけてみると、家意識や家に対する能動性・受動性などそれぞれにかなり大きな温度差があることをうかがわせている。素行や白石の自叙伝が、自らの孤高ともいえる生き方を子孫に向かって表現し、その支持を自己の存在証明として求めているのに対して、定信は家にとらわれない個人として自らを表現する。近世後期の農民、吉茂は、家そのものの安泰な存続のために、個を抹消するような離欲の生き方を子孫に求めるのに対して、近世前期の商人榎本弥左衛門の場合は、若者の野性的な逸脱や大胆かつ繊細な商いを記録に残す事自体に関心を持つように見受けられる。それでは、これらの自叙伝が、幼年期についてどのような人格形成の様子を伝えているか、次に検討したい。

四 子ども期の回顧と成長の契機

(1) 手習い；文字習得について

回想録の中でまず目立つのは、文字習得に関する思い出である。日本における本格的な自叙伝の嚆矢として著名な新井白石『折りたく柴の記』(1716)は、彼が数え3歳のとき絵双紙『上野物語』の字をこたつに腹這いでうつしとって遊んでいた

ら、両親が喜んで、その字を屏風に仕立てたと伝えている。数え三歳の子どもがはじめて書いた文字なので、記念の気持ちだったのであろう。しかし同時に、文字に関心を持つ利発な子どもの様子を彼の才能を見だし、屏風を表装することで、才能の開花を励まそうという意図が両親にあったと思われる。そんな教育熱心な親に励まされたのか、彼は「つねの戯れに筆とりて物かく事のみをしけ」る子どもだったという。

また、白石の関心は文字の手習いだけではなく、読書や詩作にも向かった。4、5歳のとき、太平記の講釈を父について聞いていたとか、6歳で七言絶句を3首講じたという才能のひらめきが綴られているのは、本人の記憶もあるだろうが後年親が彼に語って聞かせた話が含まれているのだろう。

しかし、白石の父は、彼を学者にすることは諦め、能書家への道を開いてやろうとした。一つには、知人の助言で、学匠（学者のこと）になるには、「利根、気根、黄金」が必要で、白石は利根と気根はあるものの、お金がない、という判断だったという。また、今ひとつの理由は、白石が藩主一族に特別目をかけられた子どもで、父親の自由にならない部分があったからだった。

白石は、1657（明暦3）年、江戸大火の後の仮小屋で出生し、「火の児」と呼ばれていた。緇（むつき、おむつのこと）のうちから藩主の母君に寵愛され、3歳からは特に藩主にも寵愛されて育った。南部利直に養子に望まれたが藩主が離さなかった、という逸話が遺されるし、疱瘡が重篤だったときも藩主の命で石川玄朔が「コンソウル」を与え、助かることができたという。明晰な神童として、藩主とその母に愛されていたのである。帯解き、袴着も、年を待たずに主家があつらえて着せた⁽²³⁾。

藩主が家人の子まで「家の子」という意識を持って生育儀礼や進路に関与するということは、近世

の家を考える際に念頭に置くべき事柄の一つである。自立しつつあった近世の直系家族は、武家の場合も農村の場合も、主従関係や本家分家関係で大きな「家」に従属しながら、自立性を強めようとする両側面を持っている。実態の上での自立の度合いを個々に明らかにしていかなければならないと思う。

こうして、白石の父親は幼い白石に能書家への道を準備させた。藩主の留守中に8歳から手習いを始め、9歳の秋や冬、日課が終わらないと水桶の水をかぶって目を覚まし、日課を終えた逸話は国定教科書に掲載されてよく知られている。13歳から祐筆の仕事に従事した。青年期には太刀打ちの技に関心を深め、16歳の頃は武芸を好み、読書を好んだという。

白石は17歳になって初めて、『翁問答』を友人から借りて「聖人の道」（儒学）にふれた。

そして、医師江馬玄牧益庵に小学、四箴の手ほどきを受けたあとは、自学で四書五経の素読に取り組み、詩作も独学で修めた。その後21歳で藩のもめ事を機に、主家を離れ、初めて本格的に学問を始めることができたのである。

このように、彼は幼児期から、のちの学者としての才能を発揮していたし、親がそうした彼の才能に注目し、教育に熱心であったにも関わらず、学者として順調に成長してゆくチャンスには恵まれず、晩熟な学者だった。

いっぽう文字習得が苦手な子どもだったと云う回想もある。近世における集約農法の発展を象徴する名著『農業自得』（1841年）の著者、田村吉茂は、書記能力を不可欠とする村役人の子なのに、勉強嫌いで両親を悩ませた。母親が「そのように手習いが嫌いでは、乞食にでもなるしかない」と嘆いたら、祖母（ばば）が「この子は小細工が好きだから大工にでもなれば良い」と助け舟を出してくれた。すると父親が「大工も文字が書けねば

(材木の)番号もつけられぬ」と叱ったと云う。結局吉茂は成人するまで手習いをせず、18歳のとき村に「算法師」が40日間滞在したときも、親族からたびたび出席を促されながら、手習いさえしていないのだから、算術はとても無理、恥をかくだけだと断ってしまったという。しかし彼は農業にはことのほか熱心で、後年、農事日記を付ける必要から独学で文字を覚え、著書を数多く遺した。彼の回想は、農村の子どもの学習動機のあり方や親の教育関心を示唆していて興味深い。

(2) 英才教育と「学匠」のアイデンティティ

学者として晩学だった白石とは対照的に、山鹿素行は早期から儒者への道を歩んだ英才教育の様子を伝えている。

彼は、6歳から学問をはじめ、「八歳の頃までに四書五経七書詩文の大方を読み覚え」という。取り次いでくれるものがあって、9歳で林羅山に入門した。11歳までに無点の本で読書できるようになったという。

何と数え11歳のとき、二百石で奉公という誘いもあったというが、親はこれを断った。さらに14歳で達者に詩文の贈答ができるようになり、15歳のとき、初めて大学の講釈をおこない、多くの聴衆が集まったという。早熟な学者は、話題になりやすかったのである。また、16歳で孟子の講釈をおこなういっぽう、「幼弱より、武芸、軍法、稽古怠らず」とつとめ、兵学は、尾畑勘兵衛の印可、21歳で印可添状を与えられた。さらに、17歳で高野山按察院光宥から神道伝授をうけ、忌部神道の口伝ものこらず伝授されたという。若者に成長した素行は、その頃から歌学を好むようになり、20歳までに「源氏物語」ほか国文学を広田担斎から修得している。

『配所残筆』は、先述のように自らの学問の正統性を主張することにテーマがおかれたので、幼年

期・青年期の回想はあまり丁寧ではなく、学問修行への動機を、誰がどのように導いたのか詳細はわからない。この自叙伝では、学問論と追放事件以外でやや注目されることは、職業としての儒者が、どのようにして奉公先を選択していくのか、といった奉職の記述であった。「幼年期」という対象からは逸脱するが、簡潔に触れておきたい。

素行は成人後、紀伊大納言頼宣や老中阿部忠秋などへの奉公の話はいろいろあったが、成り行きで実現しなかったと書く。前田家からのさそいは、千石に届かなかったので断ったという。25歳から松平越中守定綱との交流があり、家光への奉公の取り持ちを祖心尼がはかって、素行自身大きな期待を持っていたようだが、実現目前に家光が崩御した。そこで播州赤穂への奉職となったのである。しかし、赤穂への奉公に必ずしも満足していた訳ではなく、浅野内匠頭に9年仕えたあと、「当分永浪人」覚悟して知行返納している。彼らは、自分が儒者として何石扶持にふさわしいか、プライドを持って値踏みしていたようで、しばしば浪人して研鑽に励むことを意識的に選びとっている。

類似した記述は浪人して学問修行に向かった白石にもあって、彼は手習い師匠を薦める知人もあったがあえてしなかった。富商の養子になる話(仲介は住倉了仁)を断って、父に喜ばれたという。さらに、医業を進めてくれる人もいたが、これも断った。もっと興味深いのは、富商河村瑞軒がスポンサーを申し出たのに、これも断っており、「三千両を捨てて傷のある儒者を育てるな」と言い放っている。37歳のとき(元禄6=1693)、ようやく甲府の徳川綱豊(後将軍家宣)に仕官が決まって、これが幕政への参画の契機になった。

「学匠」ということばは、時間とお金と気力を贅沢に費やしてようやくたどり着ける孤高な職人だという彼らの自認を、よく表現しえた言葉なのかもしれない。

(3) 「王子教育」の孤独と側傭人の愛情——定信の場合

松平定信「宇下人言」は、「平生『これぞ嬉しき、これぞ楽しき』と思う事はなし。」という寡欲な天下人の人生観を、その人格形成の過程を通して語っている。

近世社会は濃密な情欲の世界を都市の一角、郭という世界に閉じ込めて、表の社会はきわめて禁欲的な価値観で支配された社会だった。欲望に振り回されないというだけでなく、そもそも欲望を去ることが価値と考えられていたのである。したがって定信が「房事なども、子孫増やさんと思えばこそ行なう。かならずその情欲に堪え難きなどのことはおぼえ侍らず。…平日『これぞ嬉しき、これぞ楽しき』と思う事はなし。」などとかいても、決して大げさでも変人でもなく、近世の人間像としては誠に理想的な人格者だったのである。

しかし、彼には生き甲斐があった。それは、「わが嬉しきと思うは、たとえば『この法度・禁令・格式、かく調べて、かように書いて』とわが心におもいて、さて人になさしむるとき、わが思いしよりもよき事多く出来くると、誠に愛する子のよき事して親のよろこぶが如く、嬉しき云わんかたなし。」という治国平天下の達成感である⁽²⁴⁾。

定信は、宝暦8年12月27日出生。「生育の頼みなかりし」虚弱な子どもだった。7歳のとき(明和元)大塚大助孝綽が書と学問の師を勤めて『孝経』素読と仮名^{たかやす}の習字を開始した。これも習字や素読の始期として、当時としては、ごく一般的な年齢である。

8-9歳の頃、人々に「記憶もよく才もあり」と誉められてその気になっていた。ところが『大学』を読み習い始めたら、何度教えられても覚えられない。さては人々の誉めたのは「諂いおもね」たのか、「実はいと不才にして不記憶」なのだ子ども心に「ふとさとりぬ」という。そして、「幼きとき

褒めののしるはいとあしき事なるべし」と、おだてて育てることへの懐疑を記している。冷静に自己認識ができる子どもは、善意から出たとしても周囲のことばかけのわずかな虚偽を感じ取るし、そのことで密かに傷つくが、近世の自叙伝にこのような客観的な自己認識が書き込まれているのはやはり驚くべきことで、定信の少年期における自我の確かな成長をつたえている⁽²⁵⁾。

10歳頃には「名を代々に高くし、日本・もろこしへも名声をならさん」と立身出世を考えていた。それは大志のようだけれども、愚かだったと後年述べる。また書に定評があつて求めるものが多く、大字を求めに応じて書いたという。「みなみな請いもとめしも、へつらいのたねに生い出し事なれば、そのもとめに依じて書きける心いと浅かりけれ。」⁽²⁶⁾と、幼い時期を振り返る記述は、これもきわめて冷静である。詩作もこの頃開始した。

12歳(明和6)で『自教鑑』を著し、15歳の頃には弓術、猿楽をたしなんだ。市川で白雁を射て、兄から矢羽根の賞を受けたというが、父や兄からの報償を記録しているのは、それだけ父、兄の権威が高く、従順に喜んだのであろう。

また、そのころ狩野の絵を習ったが遂げず、22、3歳で再び山本又三郎に絵画を習った。絵は將軍や光格天皇に献呈する腕前であった。

以上のように、習字と読書、詩作、弓術、猿楽、絵画と、彼は多面的な学芸を獲得したが、自叙伝の記述のなかで最も興味を引かれるのは、彼が寡欲な人間形成を果たした、日常生活の中の「王子教育」ともいえる躰だった。田安邸での暮らしは伝属の者が多い訳でもないのに、何事も物足りない日々だったと彼は回顧する。14、5歳まで煙草は許されず、食事や衣服も好みをいう事は禁じられていた。鼻紙入れを紗綾で乳母が作ってくれたことがとてもうれしい思い出だったというのだから、勤儉な暮らしぶりが徹底している。彼は、小

さい時から食事や衣服に厳しく育てられたので、儉約が苦でなくなった、「おさなきときはいかにも事少なにして、法度厳にそだつべ」きであると、自己の寡欲な性格をしつげとの関係でとらえている。また、政事は領主の家業ともいえるが、彼は14-5歳まで、遊ぶ同輩もなく詰め所で黙々と人の話を聞いたことが、後年の心のそなえになったと述べる。

このように孤独な少年は、ときとして反抗や爆発も起こした。短気を起こすと、伝属の大塚孝紳や水野為長がとくによく諫めたという。彼らは毎日、一日の終わりに日々の善し悪しを若き定信に語り聞かせた。諫めはそれなりに奏功して、定信は床の間に太公望の釣りの絵をかけ、次第に、自ら怒りの情をしづめることを覚えたという。18歳になると、反抗期はぴたりとやんだようで、「洗いそぎしようにはなりたるぞ希有なれ。全く左右の直言ありし故なるべし。」と伝属のものたちを評価している⁽²⁷⁾。

このように、定信の自叙伝は、幼年期、少年期の自らの成長を、環境、とりわけ周囲の人々の関わり方との関係で考察する記述に富んでいる。それだけ彼が人間形成における工夫と熟慮とを重視したこと、子育ての術に関心と理解が深かったことがうかがわれる。

(4) 庶民のしつけ文化——榎本弥左衛門、初世中村仲蔵の幼年期

こうした子どもに対する注意深い配慮は、その内容は異なっても庶民の親の間にも存在した。

川越商人、榎本弥左衛門(1625年出生)の日記『榎本弥左衛門覚書』には、幼児期に臆病な性格で、3歳ころには、人に抱かれて棚の下を通るとき壱間(約3メートル)も前から頭をすくめていたとか、臼(粃を摺る臼)の側は「返って」しまおうといけない(臼はしばしば「子返し」(嬰兒殺し)に

使われたので、大人がそのように脅かしたのであろう)と、近寄らないような恐がりな子どもだったという記述がある。大人から聞かなければあり得ない記憶であろう。

また、数え4,5歳のとき、母親の外出にはどうしてもついてゆくと後を追ったとか、6歳のとき、側にいる大人にからかわれたのを怒って我を押し通したなど、現代の子どもに比べて、愛着や自己主張といった自我の緩やかな発達を記録にのこしている。さらに、やはり6歳のとき、母親がお金をくれないと、庭に飛び降りて俵転びをして腹を立てた、それでもくれないと自分の髪の毛を我が手でむしって長泣きをした、実は、これはそんなことをする子どものうわさ話を聴いたのでまねをしたのだなどと、しつけのあり方を考えるような視点で自らの幼児期を振り返ってもいる⁽²⁸⁾。

歌舞伎役者、初世中村仲蔵の自伝、『月雪花寝物語』も周囲の大人の関わり方を印象的に書き留めている。彼は花柳界の町深川小松町の生まれで、数え4歳のときから両親にわかれ店請に養われていた。厄介として預けられるとき、木綿袴、上下染め分けの振り袖を着てきた、という。まだ幼く「大用、小用、毎晩毎晩」してしまったが、粗相をするたびに、木綿の袴を着せられたという。おそらく、親元へ帰すぞと云う折檻だったのだろうが、袴がきつくて嫌いで、悪い事をするたびに木綿の袴が出てくるのが子ども心に恐ろしかった、と書く。

7歳から踊りを習ったが、「不器用で覚えが悪く」踊りの師匠の折檻は、鯨の棒と、光る小刀で、太ももやお尻を叩かれたり切られたりした。駆け落ちをしようと友達と相談して露見し、また、養親につんつるてんの袴を着せられて、外に立たされた。養母は菰をもって『おれを包んで川に投げ込む』というし、子ども仲間にも笑われて、途方に暮れていたところを、歌舞伎の座元の奥様に助けられ、そこから彼の運命が変わってゆく⁽²⁹⁾。

『駆け落ちをする』というから、『おれも行く』という、かか様が聞いての、……かの裕を出して着せた。……(中略)。

「かか様がお菰をもって来て、『おれを包んで川に投げ込む』と、おれをお菰に包んだよ。」(旦那(中村勝十郎)の奥方のお門様が見つけて、)「かか様に詫びを入れ湯に連れて……(中略)……お菓子をくれて、抱いて寝てくれた。」(自宅へ帰るのが怖くて、)「稽古ばかりに帰って、朝も夕も太夫元様にて、旦那の給仕をし、どこへもついていって、踊りを踊って、みんながおれを褒める。」

榎本弥左衛門日記ではく挽き白で引いて子返しをする、だったのに対して、中村仲蔵の場合は、<親元に帰す(捨てる)>ことを暗示する裕や、<苞にくるんで川に流す>という間引きの脅しだったりして、庶民の親が養育拒否と云うきつい表現で子どもを脅しながら、しつかに懸命になっていた様子をかいま見ることが出来る。仲蔵の自叙伝の場合は、このあと座元がいかに子どもの関心をうまく惹きながら芸を教え込んだか、座元の奥様が他人の子とは思えない程、仲蔵を抱擁して育てたこと、芸への開眼の契機、など成長の要点が自覚されて書き込まれている。

次に引用するのは、数え10歳頃の経験だが、座元(中村伝九郎)の改名披露の顔見せで、座元の息子とともに奴の役で初舞台を踏んだときの回想である。子役の意欲を継続させるために、座元は毎日氷砂糖をご褒美にくれた。また、それだけでは不足と思ったのか、赤地に鶴と若松の模様羽織着物を用意して、本気で踊るならこれをあげようと幼い彼の決意を確かめるのである。

「毎日毎日氷砂糖くんさった。(また、)褒美に赤地に舞鶴と下に立った鶴と若松の模様……

の羽織と着物を出しての、また裕を出しての、『どちらがよいか。……』といいなされた。『赤いべべがよい』といったれば『よく踊るならこれをやろう』と……。 (中略)「かか様所へいつて話せ」との事、帰って話したければ、(かか様は)……倉の中で灸を据えて、『どちらが良い、どちらがよい』とせめるから、『赤いがよい。赤いがよい』といったれば、『嘘をつく』とて口へ灸を据えるころへ叔父様が来て詫び事をしたからゆるされ、(それから赤い着物を着せて太夫元へ挨拶にゆき、)『踊ろうと申しますから赤を着せました。この上悪く踊ると、また裕を着せて川へぶち込みます』とて、裕を大事に持って帰りなされた。」

ここでは座元も例の裕を使った。しかし、彼は折檻のために持ち出したのではなく、選ばせ意志を固めさせるために裕を使った。江戸時代の芸能では多くの演目で子役を登場させたが、子役を育てる経験的な技術が伝承されていたのではない。また、着物を贈るについて進路選択に対する養母の承諾が必要と考えたのか、母親の元にかかせているが、これも大人同士の暗黙の連係プレーで子どもを導いている。養母の方法は、灸を据えるという今回も脅しの手法だが、ここにも助け舟を出す叔父が居る。

次の引用も、数え10歳前後、芸の稽古に恒常的な意志が芽生え始める契機を書き留めた部分だ。

「『四季椀久』を踊り申し候。所々忘れ申し候。過怠として20遍踊り申し候。」(踊り疲れて)「のりのように」「前後もしらず臥せり申し候。」(真夜中に天満や助右衛門様が帰って話しているとき、)「私起き上がり(夢中で)椀久一番唄いながら踊り申し候。」(中略)「天満や助右衛門様夢中の所作御覧ありて御よろこび成候由、明日御

わび成され下され候。これより覚えよろしく相なり、……（後略）⁽³⁰⁾

太鼓や鼓などの稽古は止めて所作稽古ばかりになったという。

きっかけは、過怠を叱られ20回踊る罰を受けたことだった。折檻に鯨の棒や光る小刀を持ち出す踊りの師匠にしても、この過怠20回の罰にしても、今日なら体罰として問題になりそうな厳しい指導である。しかし救いは、どこにでも助けてくれる、あるいは慰め励ましてくれる大人が居たということであろう。ちょうど、子どもから少年へと移行する時期で、夢中に20回踊り、かつそれをほめられた経験に励まされながら、彼は踊りへの集中力を高めていくことができた。

その後、仲蔵は15歳で元服、その年、恩人である座元の妻、お門様が病死した。その頃彼は、控え室を持てる役者へと成長してゆく。

仲蔵の自叙伝は、役者の記録らしく、物語のように語られているので、大人と子どもの関わりが具体的にそこから理解できる。もっぱら折檻と脅して必死に子どもを育てようとする養母の愛情、興味を引き自ら選ばせて踊りに取り組ませる座元伝九郎、抱擁しかわいがる座元の妻お門や近隣の女たち。この近世中期、江戸下町に生きた子どもの幼年期の記録に特徴的なことは、子どもである彼の周囲に実に多くの大人が居て、それぞれの関わり方で正面から彼と向き合っていることだろう。脅す大人からも愛情は伝わり、大人たちは役割を分担していて、必ず助け舟を出す大人も居るのである。踊りや所作に対して、彼はジグザグの経過を辿りながら、次第に稽古に対する集中力を身につけ、役者として育てられてゆく。濃密な共同体的関わりが健在なのは、花柳界故かあるいは舞台興行の座元で暮らしたためか、おそらくそのいずれも、農家や一般の商家以上に人の出入りの

多い世界だったのであろう。

以上、6つの自叙伝および自叙伝的な記述をとりあげて、回想の中に書き込まれた幼年期の記録を検討した。階層は上級武士が3、農人・商人・芸人各1で、下級武士がないし、農商芸人は1例から一般化することは許されない。時期的には、彼らが過ごした幼年期で見た場合、近世前期が3、中期が2、後期が1と、前期にウエイトがかかっている。したがって、もう少し多くの事例を探し、後の天保生まれ世代やポスト天保世代の幼年期記述と比較をおこなわないと、一般的なことはいいにくい。

しかし、このわずかな例のなかからも、今後の研究ために、仮説的な結論を提起しておくことは可能であろう。

1. 一つは家意識と家からの独立性に関して。近世前期の自叙伝は、親の足跡や子孫への関心と感情はうかがえても、家そのものが流動的なためか、家に対する受動性は見られない。それぞれが個として、家からのある程度の自立性を有している印象が強い。家の固定化した社会が続くと、次第に構成員が家に対して受動的になってゆく印象がある。近世前期はそれだけ、戦国時代の自我の強い人格がまだ影響力を有したのだろうか。
2. 子ども期や人間形成のプロセスへの言及はきわめて具体的に記述されている自叙伝が多い。親からの伝聞と自らの記憶の混在している傾向がある。子どもに丁寧に関わる大人たちと、深い愛情、子育ての技術への注目が特徴的である。子育てで重視されている内容は、階層によって違いがありそうだが、勤勉な努力の習慣や他人に迷惑をかけない生活習慣などは共通している。子育ての経

験的な技術が「家」と言う場で継承された社会だった。

3. 子どもが育つ環境が、おもに直系家族の人間関係の中なのか、それとも共同体的な広い人間関係のなかであるのかは、個別の事例によって相当な差が感ぜられた。しかし、使用人や主家の人間関係、遊び仲間など、近代の子どもよりは明らかに多くの人々のなかで子どもたちは成長している。
4. 早期の才能発掘と一方での晩学・晩熟性が共存する社会である。大人たちは教育に熱心だが、チャンスは限られている。才能の開花の契機について自覚的な自伝が多い。仕官か浪人かは生計の維持という面からは重大事だが、武士では「幸せ」に縛られない価値の追求が目指された。学者や指導者には、判断力、前例についての調査力、論理的な指導力が重視されている。

後の世代と比較することで、さらに検討したい。

註

- (1) 科研費プロジェクト『「家」と『家族』における人間形成史の研究』(代表 小山静子)2004-2006年。助成番号 16530500。共同研究のまとめは次年度になるが、この共同研究において、「家族」「家」の用語は、ほぼ以下のように使われていると筆者は理解している。一般的には、「家族」は性と生殖、子どもの養育と構成員の精神的な安定を本質的な機能として共同生活を営もうとしている最小の親族集団であるのに対して、「家」は家長の家族を中心に同一屋敷に共住して家計を共にし、財産を維持管理して持続的な生産・経営を行っている組織、社会単位をさす。(例えば明石一紀「古代・中世の家族と親族」『歴史における家族と共同体』青木書店、1992年参照。)ところで、多くの傍系親族や奉公人を抱えた中世の「家」(一家、いっけ)は、17-18世紀を通じて直系家族中心の小さな「家」に細分化されて、それぞれが経営の単位として家産と家職を継承した。それに対して、20世紀にはいと、

家産や家職の継承を課題とはしない一代限りの、消費生活中心の家族が都市に展開し、20世紀後半には一般化する。いわゆる「近代家族」である。したがって、「家」と「家族」の区別を具体的に17~20世紀における日本の家族に適用すると、ここで「家」という場合には、「家」の歴史の最終局面ともいえる近世の直系家族が経営する家をさし、「家族」は「近代家族」をさす。

- (2) 参考にした伝記研究としては、以下のものがある。文学史のなかでは例えばW.C. Spengemann; THE FORMS OF AUTOBIOGRAPHY, Episodes in the History of a Literary 1980 Yale University, 邦訳 船倉正憲訳『自伝のかたち——一文学ジャンル史における出来事』法政大学出版、1991年。心理学では西平直喜『生学史心理学序説——伝記研究から自分史制作へ』金子書房、1996年。社会学の領域で尾中史哉「明治期における『子供の交換』と『試験』——『私の履歴書』の分析より」日本社会学会編『社会学評論』第42号第4号、1992年。教育学では「吉田昇著作集」第巻二章「自伝による家庭教育の研究」年、皆川優子「『私の履歴書』にみる自己教育論」森隆夫ほか編『生涯学習の扉：理念、理論、方法』ぎょうせい出版、1997年など。文化人類学の方法については、L.L. Langness, Gelya Frank; Lives: an anthropological approach to biography 1981 Chandler & Sharp Publishers, Inc. 邦訳 米山俊直ほか訳『ライフヒストリー研究入門——伝記への人類学のアプローチ』ミネルヴァ書房、1993年。
- (3) Irene Hardach-Pinke, Gerd Hardach; DEUTSCHE KINDHEITEN, Autobiographische Zeugnisse 1700-1900, 1978 Atheaum Verlag GmbH. 邦訳 木村育世ほか訳、原ひろ子解説『ドイツ/子どもの社会史 1700-1900年の自伝による証言』勁草書房、1992年。David Vincent; BREAD, KNOWLEDGE AND FREEDOM, A Study of Nineteenth-Century Working Class Autobiography, 1981 David Vincent. 邦訳 川北稔ほか訳『パンと知識と解放と——19世紀イギリス労働者階級の自叙伝を読む』岩波書店、1991年(以下、『パン・知識・解放』と略記)。
- (4) 前出『パン・知識・解放』訳者あとがき、403ページ。合わせて『歴史学研究』568号、1987年、特集〔オーラル・ヒストリ〕参照。
- (5) 前出、注(2)参照。
- (6) 同上、1-2ページ。
- (7) 同上、9ページ。

回想のなかの幼年期

- (8) Ph. アリエス著、中内敏夫ほか訳「心性史の方法」『教育の誕生』新評論、1986年。
- (9) 前出『ライフヒストリー研究入門——伝記への人類学的アプローチ』120-121ページ。
- (10) 「解説」ガンジー『自伝』の目的；真理についての数々の実験の結果を書き留めること。思想実験の率直な記録。ネールの『自伝』獄中の孤独に耐える作業、同時に、過去の政治的事件について一つの見通しをつける事、自己中心的な視点だと言明。西洋化、近代化の所産という面も否定できない。中国の自伝、1920年代から30年代始めに噴出。改革の機運と期をいつに。自伝ジャンルは、いわゆる「アジア的な停滞」からの脱出、近代化促進の鋭敏なバロメーター。佐伯彰一「解説」『日本人の自伝』別巻1所収。
- (11) 同上、なお佐伯彰一によると、伝記文学の成立は戦国時代だという。「戦国時代の苛烈な試練期」、個人の軍事的才能、チャンスの襟首をつかむ素早さが運命の分かれ目と行った時期には個性鮮烈な人物のあいつぐ出現した、そうしたなかで『信長記』（太田牛一）、『太閤記』（小瀬甫庵）といった伝記文学の出現したのだという。また、『身自鏡』という無名の武士による自伝の試みもそのなかから生まれた。戦国時代は、個人の能力と経歴に対する強い関心と興味が存在した時代なのだという。
- (12) 例えば、只野真葛『むかしばなし』（中山栄子校注、平凡社東洋文庫、1984年）は、自分の見聞きした経験を妹に向かって語りながら、共同体（家と親族）を構成する人々の群像を描き出している。
- (13) 『日本人の自伝』別巻1、平凡社、1982年。『吉茂遺訓』は『日本農書全集 21』農山漁村文化協会、1981年 所収。榎本弥左衛門著、大野端男校注『榎本弥左衛門覚書』平凡社東洋文庫、2001年。
- (14) 同上『日本人の自伝』別巻1、15ページ。
- (15) 同上、16ページ。
- (16) 同上、484-5ページ。
- (17) 同上、481ページ。
- (18) 定信については『修行録』もあわせて参照する必要があるが、今後に残されている。
- (19) 前出『日本人の自伝』別巻1、223ページ。
- (20) 同上、405ページ。
- (21) 太田「老年期の誕生」中内敏夫・太田ほか編『老いとく生き』叢書産む・育てる・教える 第三巻』藤原書店、1992年参照。
- (22) 前出『日本農書全集 21』228ページ。
- (23) 前出『日本人の自伝』別巻1、49ページ。
- (24) 同上、245ページ。
- (25) 同上、227ページ。小さい時から厳しく育てられたので、今日も儉約が苦ではないと述べる一節で、「おさなきときはいかにも事少なにして、法度厳にそだつべし。13-4から少女を慕うの情もあったが、法度厳なので19歳で結婚するまでその情を知らな」かった、という。
- (26) 同上、224ページ。
- (27) 同上、226-7ページ。
- (28) 前出、『榎本弥左衛門覚書』、18~20ページ。
- (29) 前出『日本人の自伝』別巻1、406ページ。
- (30) 前出『日本人の自伝』別巻1、408ページ。助け舟を出す大人の存在は、次のような記述でも注目された。遊び友達には「勘六、弁之助、勘太郎、門十郎、辰松、六次、音蔵」らがいだが、駄菓子屋の袋入りの豆を分けてくれず笑い者にした仕返しに、飯をつぐところへ砂をかけたら、両親に言いつけられてしまった。頑固な父親によって戒めの蔵へ入れて、食留にされたが、お沢という女が、こっそり握り飯を差し入れてくれたという(同上、409ページ)。